

白石方言における談話展開の方法

一談話標識の出現傾向から見る一

琴 鍾 愛*

目 次

- はじめに
- 先行研究とその問題点
- 談話、談話標識、談話展開の方法とは
- 調査の概要
- 白石方言における談話標識の出現傾向
- 白石方言における談話展開の方法一琴（2005）との比較一
- まとめと今後の課題

1. はじめに

談話展開の方法の地域差は、話者が情報内容を効果的に伝えるために相手に送る談話標識にも反映されていると考えられる。そこで、筆者は談話標識の出現傾向を分析することで談話展開の方法の地域差について研究を進めてきた。

また、方言の研究において、このような地域差とともに重要な柱として位置づけられている世代差について高年層、若年層を取り上げ、考察した。

今回は、宮城県白石方言を取り上げ、その高年層話者が説明的場面において、どのよう

* 忠南大学校 日語日文学科 講師、日本語学専攻

1) 日本の特徴的方言の一つであると言われる東北方言は北奥方言（青森県、秋田県、岩手県）と南奥方言（宮城県、福島県、山形県）に区画するのが定説であるが、宮城県はその中で福島県、山形県と同様に南奥方言に属する地域である。本稿で取りあげる白石は宮城県の南西部に位置する地域で、仙台方言と同じように東北方言の南奥方言に含まれる方言であり、方言的特徴としては仙台方言と類似する点が多いが談話展開の方法においては、ある程度異なることが予想される。

な談話標識をどのように使用し話を進めていくのかを、談話標識の出現傾向を分析することで明らかにする。また、琴 (2005) の東京方言、大阪方言、仙台方言の談話標識の出現傾向との比較をとおして、日本語方言における談話展開の方法がどのようなものであるかを明らかにする。

2. 先行研究とその問題点

談話展開の方法の地域差に関する先行研究としては、久木田 (1990) が先駆的である。久木田 (1990) は、(A) 文の内容と、(B) 文頭、文中、文末のキーワードとなる語に注目し、東京方言は主観的説明が多く、「ダカラ」「ホラ」「ネッ」をキーワードにして相手に反論の余地を与えず、強引に話者の主張を押し付け、納得させていく「主観直情型」をとっている。それに対して、関西方言は客観的説明が多く、「ソレデ」などの接続詞によって説明を累加する形で、相手に続きを期待させながら談話を展開する「客観説明累加型」をとっている。

しかし、先行研究では、(A) 文の内容 (以下、本研究では情報内容と呼ぶ) を対象とした考察が行われているが、その客観的分析方法はまだ確立しておらず、(B) キーワードにしても事例研究だけではなく、それを体系的・数量的に論証することが必要であると考えられる。

そこで、本稿では、久木田 (1990) の分析の枠組みを参考にしつつ、特に、(B) キーワードとなる語、すなわち、本研究における談話標識に注目し、それを体系的、数量的に分析することで、白石方言における談話展開の方法をより客観的に示すことを試みる。談話標識を取り上げる理由は、情報内容はどのような話題が選ばれるかによって影響され、客観的比較が困難であるのに対して、談話標識は話題の影響を受けにくく、具体的形式として客観的分析に耐えるからである。情報内容については今後の課題とし、本稿では談話標識の面から白石方言の談話展開の方法を検討していくことにする。

3. 談話、談話標識、談話展開の方法とは

ここでは、本研究における「談話」「談話標識」「談話展開の方法」という概念の定義や対象範囲について述べる。

3. 1 談話

談話とは、文より大きい言語単位で、あるまとまりを持っている文の集合である。本稿では、一人の話者が相手の情報要求に対して説明を行っている説明的場面を用いる。説明的場面を取り上げる理由は、会話のやりとり場面に対し、比較的分析が容易だったからであり、まず、研究の第一歩として説明的場面から開始することにした。ただし、説明的場面といっても、会話の中での一場面であることには変わりがなく、ここでの方法や結果は、今後、会話のやりとり場面の考察にも参考になると考えられる。

3. 2 談話標識

談話標識とは、談話の中で情報内容とは直接関わっていないが、「情報の内容理解を助ける」「会話者間のやりとりをよりスムーズにする」「会話者間の人間関係を円滑にする」(西野1993)など、話者が効果的な情報伝達のため使う形式であり、品詞という既存の文法カテゴリーを超え、様々な言語形式から成り立つものである(Fraser1990、Schiffrin1987)。日本語では、接続詞、間投助詞、終助詞、副詞、感動詞、応答詞などが談話の中で談話標識として重要な役割を果たしているが(田窪1992、西野1993、三牧1993、メイナード1993)、本研究では白石方言の説明的場面において、特に、高い頻度で使用される談話標識を取り上げ、考察を進めることにする。

3. 3 談話展開の方法

談話展開の方法とは、上記のような「談話」において、話者がどのような談話標識をどのように使用し話を進めて行くのか、その方法を指す。

4. 調査の概要

本稿で使用する談話資料は次の調査²⁾によって採集したものである。

2)東北大学国語学研究室で毎年7月末実施している方言調査では、その地域特有の音声(音韻)、アクセント、語彙、文法、談話などの調査が行われているが、筆者はこの中で談話の部分を担当している。ここで使用する談話資料は2003年7月、2004年7月の二回にわたって行われた白石方言の調査から得られた資料であり、筆者はこの調査で高年層5名、若年層5名、計10名のインフォーマントを対象に12時間の談話資料を採集している。本稿で使用する資料はその中で高年層の談話資料、約7時間分を文字化したものである。

- ①調査時期：2003年7月、2004年7月（東北大学国語学研究室の方言調査）
 ②調査地：宮城県白石市
 ③調査場所：白石中央公民館
 ④インフォーマント：白石出身の高年層5名
 ⑤調査方法：質問による面接調査。すなわち、筆者が直接インフォーマントに会って、地元の方言や名物など、10項目にわたる質問をし、それに対して話者が説明を行っている場面を分析対象にした。談話資料は7時間程度の録音資料を文字化したものである。

5. 白石方言における談話標識の出現傾向

5.1 談話標識と機能

白石方言の高年層話者は説明的場面で「ダカラ」「ソレデ」「ソシテ」「ソースルト」「ソレカラ」「ソーシタラ」（接続詞）、「ヤハリ」（副詞）、「ホラ」「ネ」「ウン」「エ」（感動詞）、「ネ」「サ」（間投助詞）、「ネ」「ヨネ」「ワネ」「デショー」「ジャナイ」（終助詞・助動詞）のような談話標識を使用し、話を進める傾向がある。これらの形式の品詞は接続詞、副詞、感動詞、間投助詞、終助詞、助動詞など様々であるが、いずれも説明的場面において、効果的情報伝達に大事な役割をしていると考えられる³⁾。

そこで、本稿では、白石方言の高年層の談話資料を検査し、これらの談話標識が談話の中でどのように働いているのか、その一つ一つの形式の機能についての検討を行った。白石高年層話者が説明的場面で使用する談話標識と機能を示したものが<表1>である。

<表>には談話標識の記号（A（A'）～F、■）、代表形と具体的形式、機能が記されている。また、「ネ」は感動詞、間投助詞、終助詞にまたがるので、代表形欄に略語でその区別を表示した。イントネーションはその形式が必ず上昇調を伴う場合のみ（↗）を記した。上昇イントネーションには、上がるだけのものと上がって下がるものの二種類があるが、ここでは区別せずに上がる記号だけで記した。

3)本稿で取り上げる談話標識は、①談話の進行に関わる標識（発話権取得・維持（「ダカラ」）、説明開始・累加（「ソレデ」「ソシテ」「ソースルト」「ソレカラ」「ソーシタラ」））、②情報の共有に関わる標識（情報共有表示（「ヤハリ」）、情報共有喚起（「ホラ」）、情報共有確認（「ネ」「ヨネ」「ワネ」「デショー」「ジャナイ」）、念押し（「ネ」））、③談話の理解に関わる標識（引き込み（「ネ」「サ」）、自己確認（「ウン」「エ」））の三種である。

<表1> 談話標識と機能

| 記号 | 代表型 | 具体的形式 | 機能 |
|----|--|--|---|
| A | ダカラ | ダカラ、ダカラー、ダガラ、ダガラー、ダラ、ダ、ダー、ンダカラ、ンダガラ、ンダ、ンダー、ソレダカラ | 発話権取得：談話の最初に現れ、相手から発話権を受ける。 発話権維持：談話の途中に現れ、続けて話を進めようとする話者の意志を相手に示すことで発話権を維持する。 |
| A' | ソレデ / ソシテ / ソースルト / ソレカラ / ソーシタラ / | ソレデ、ソイデ、ソンデ、ンデ、ンデー、デ、デー、ホイデ、ホンデ / ソシテ、ソシター、ソッテ、ソッター、ホシテ、シテ / ソースルト、ソースット、ソスト、スト、ホット、ット / ソレカラ、ソレガラ / ソーシタラ、シタラ | 説明開始：談話の先頭に現れ、説明を開始する。 説明累加：談話の途中に現れ、説明を累加する。 |
| B | ヤハリ | ヤハリ、ヤッパリ、ヤッパ | 情報共有表示：情報の共有前提に話を進めていることを相手に示す。 |
| C | ホラ | ホラ、ホレ | 情報共有喚起：話者と相手が以前共有していた情報や今後共有可能であると判断される情報を相手に喚起する。 |
| D | デショー(↗) / ヨネ(↗) / ワネ(↗) / ネ(↗)(終・感) / ジャナイ | デショ(↗)、デショー(↗) / ヨネ(↗)、ヨネー(↗) / ワネー(↗) / ネ(↗)、ネー(↗) / ジャナイ、ジャナイデスカ、デワナイデスカ | 情報共有確認：相手に情報の共有を積極的に求め、確認を行う。 |
| E | ネ(↗)(感) | ネ(↗)、ネー(↗) | 念押し：情報の共有を再確認し、念を押す。 |

| | | | |
|---|---------------|------------------|--|
| F | ウン / エ | ウン、ウーン / エ、エー | 自己確認：そこまでの話を自分の中で自己確認、そうすることで相手も納得させながら話を進める。 |
| ■ | ネ(間・終) / サ | ネ、ネー / サ、サー | 引き込み：そこまでの話を相手が理解しているかを確認、相手を話の中に引き込みながら話を進める。 |

以下、5. 2節、5. 3節では、談話標識の出現頻度や組み合わせパターンから白石方言の高年層における談話展開の方法を考察する。

5. 2 談話標識の出現傾向

5. 2. 1 事例分析

高年層の談話展開の方法を明らかにするため、ここでは調査して得られた談話資料の中から高年層話者の談話展開の特徴を典型的に表していると思われる次の三場面を取り上げ、考察を進める⁴⁾。

談話資料1 白石を代表するものについての話

(昭和5年生まれ的女性 当時72歳 主婦)

| | |
|---|---|
| ① | ①シロシノ サン ミツノ シロト カグンデス ②シロイト ユー |
| ② | ③ミンナ シロイ ^デ ショー (ノ) |
| ③ | ④クズモ シロイ ソレガラ ウーメンモ シロイ ワシモ シロインデ ^ネ ⑤サンパク シロイシ サンパク |
| ④ | ⑥コレガ トクサンデス |
| ⑤ | ⑦ソレガラ ササチマギワ コレワ タベモノトシテ コレワ ズーット アノ ダイダイ ウケツガレデ キタ タベモノデス ウン |

談話資料1で、話者は情報内容を相手に伝えるために様々な談話標識を使用し話を進めている。まず、②で話者は「デショー (ノ) で「(くずも)温麵も和紙も皆白い」という情報の共有を確認する。③で話者は「ソレガラ (=ソレカラ)」で「(くずも) 温麵も和紙も皆白いので白石三白という」という説明を累加し、「ネ」で相手を話の中に引き込みながら話を進める。

4) 談話資料の中で、①、②はポーズで分けた文の番号であり、文法的には句ないし文に対応する。また、①、②は形式・意味的に一つのつながりを持つ文の番号であり、文法的には文ないし文連続に対応する。

⑤でも話者は、「ソルガラ (=ソルカラ) 」で「笹粽は食べ物として代々受け継がれてきたものだ」という説明を累加し、「ウン」で自己確認しながら話を進めている。このような傾向は次の談話資料2、3からも認められる。

談話資料2でも、話者は情報内容を相手に伝えるために談話標識を使用し話を進めている。まず、①で話者は「ホラ」で「修身というと古くなるけど、昔は修身というものがあつた」という情報の共有を喚起し、「デショー (ノ) 」で情報の共有を確認、さらに、「ネ (ノ) 」で念を押しながら話を進める。また、②で話者は「ネ (ノ) 」で「修身というのは教育勅語ではないけど、親を大切にし、兄弟仲よく (しなさいと言っている) 」という情報の共有を確認する。③で話者は「ホラ」で「(昔は修身以外に) 道德教育 (もあつたので、犯罪が少なかった) 」という情報の共有を喚起し、「ネー (ノ) 」で情報の共有を確認する。④で話者は、「ネー」で相手を「あれ (犯罪が起っているの) を見るたびにみんなで『人を殺すのはなぜでしょうね』と言っている」という話の中に引き込みながら話を進めている。

談話資料2 犯罪が多くなったことについての話

(昭和2年生まれ的女性 当時78歳 主婦)

| | |
|---|--|
| ① | ①ムカシワ ホラ シューシントカッテ ユート フルクナルケド アッタ デショー (ノ) ネー (ノ) |
| ② | ②オヤオ タイセツニ キョーダイ ナカヨクトカッテ キョーイクチョコゴデナイケド ネー (ノ) |
| ③ | ③アト ホラ ドートク キョーイク ネー (ノ) ホントーニ |
| ④ | ④「アラー ナンデ ヒト コロスダベナー」アレ ミルタンビニ ネー 「ナンダ ベナ」ツテ イッテンノ ミシナデ |

談話資料3 温麺についての話

(昭和5年生まれ的女性 当時2歳 主婦)

| | |
|---|---|
| ① | ①アノー ケッキョク カンメンデス ワネ (ノ) |
| ② | ② デ セーゾー ホーホーガ チョット コー デショー (ノ) ③チョット チガウミタイ |
| ③ | ④ワタシモ クワシクワ ワカンナイデスケドモ ナンカ ソーユーヨーナ オハナ シオ ワタシワ ウカガッテマスケドモ ネ エー |

談話資料3でも、話者は情報内容を相手に伝えるために談話標識を使用し話を進めている。まず、①で話者は「ワネ (ノ) 」で相手に「(温麺は) 結局乾麺だ」という情報の共有を確認しながら話を進める。また、②で話者は「デ (ルデ) 」で「(温麺は他の麺

と) 製造方法が違う」という説明を累加し、「デショー (ノ) で情報の共有を確認する。③で話者は「ネ」で相手を「私も詳しくは分からないけれども、そういうなお話を伺ったのだ」という話の中に引き込みながら話を進めている。また、「エー」でそれについて自己確認ながら話を進めている。

談話資料 1、2、3から談話標識だけを取り出して、談話標識の組み合わせパターン (横のアルファベットの配列) と談話展開 (縦の①~③、④、⑤の流れ) を示したのが<図1><図2><図3>である。組み合わせパターンについては、5. 2. 3節で詳しく述べることにする。

<図1> 談話標識の組み合わせパターンと談話展開

| |
|------|
| ① |
| ②D |
| ③A'■ |
| ④ |
| ⑤AF |

<図2> 談話標識の組み合わせパターンと談話展開

| |
|------|
| ①CDE |
| ②D |
| ③CD |
| ④■ |

<図3> 談話標識の組み合わせパターンと談話展開

| |
|------|
| ①D |
| ②A'D |
| ③■F |

次の5. 2. 2では、談話標識の出現頻度を全て示すことで、談話標識がどれくらい使用され、談話が展開するのかを検討する。

5. 2. 2 談話標識の出現頻度

高齢層を対象にした5名の談話標識の出現頻度⁵⁾を調べた結果をまとめたのが<表2>であ

5)本稿では5名の話者を分析対象としているが、これは筆者が以前に行った東京、大阪、仙台の調査結果を参考に

る。〈表〉の縦軸にはインフォーマントの性別 (F、M) やインフォーマント番号の他、その話者から採集した談話の総数を括弧に入れて記した。横軸には談話標識と談話標識の記号 (A (A') ~F、■) とその機能を揚げた。また、各欄の数値は次の方法によって算出したものである。ただし、〈表2〉では談話数を省略し談話標識の総出現回数 (延べ数) = 一談話あたりの平均出現数だけを記した。

$$\frac{\text{談話標識の総出現回数 (延べ数)}}{\text{談話数}} = \text{一談話あたりの平均出現数}$$

〈表2〉 談話標識の出現頻度

| 談話標識と機能 話者(談話数) | A ダカラ | | A' ソレデ | | ■ ネ、サ 引き込み | B ヤハリ 情報共有表示 | C ホラ 情報共有喚起 | D アノ 情報共有確認 | E ネ(ノ) 念押し | F ウン 自己確認 |
|--------------------|----------------|-----------------|----------------|------------------|------------------|--------------------|-------------------|-------------------|------------------|-----------------|
| | 発話権取得 | 発話権維持 | 説明開始 | 説明累加 | | | | | | |
| F1 (38) | 8 = 0.21 | 33 = 0.87 | 1 = 0.03 | 66 = 1.74 | 123 = 3.24 | 11 = 0.29 | 114 = 3.00 | 46 = 1.21 | 3 = 0.08 | 28 = 0.74 |
| F2 (55) | 2 = 0.04 | 17 = 0.31 | 0 = 0 | 10 = 0.18 | 178 = 3.24 | 20 = 0.36 | 14 = 0.25 | 57 = 1.04 | 1 = 0.02 | 82 = 1.49 |
| F3 (56) | 6 = 0.11 | 37 = 0.66 | 2 = 0.04 | 153 = 2.73 | 318 = 5.68 | 49 = 0.88 | 29 = 0.52 | 97 = 1.73 | 0 = 0 | 76 = 1.36 |
| M4 (38) | 5 = 0.13 | 34 = 0.89 | 3 = 0.08 | 66 = 1.74 | 116 = 3.05 | 20 = 0.53 | 6 = 0.16 | 9 = 0.24 | 0 = 0 | 19 = 0.50 |
| M5 (22) | 1 = 0.05 | 10 = 0.45 | 0 = 0 | 19 = 0.86 | 44 = 2.00 | 55 = 2.50 | 1 = 0.05 | 38 = 1.73 | 0 = 0 | 47 = 2.14 |
| 総平均 (227) | 0.11 | 0.64 | 0.03 | 1.45 | 3.44 | 0.91 | 0.80 | 1.19 | 0.02 | 1.25 |
| | 0.75 | | 1.48 | | | | | | | |

例えば、〈表2〉のF1という話者は38談話中、8回A (ダカラ) で発話権を取得し、33回A (ダカラ) で発話権を維持しながら話を進める。また、1回A' (ソレデ)

ある程度一般性が導き出せると考えられる最低の人数を設定したものである。すなわち、東京、大阪、仙台の調査で、5人以上人数を増やしても談話標識の出現傾向に差が認められなかったため、白石では5人程度を考察対象にしたのである。今後、必要があれば、人数を増やして研究を進めていきたいと考える。

で説明を開始し、66回A' (ソレデ) で説明を累加、123回■ (ネ、サ) で相手と話の中に引き込みながら話を進める。さらに、11回B (ヤハリ) で情報の共有を前提に話を進めていることを相手に示し、114回C (ホラ) で情報の共有を喚起、46回D (デショー (ノ)) で情報の共有を確認し、3回E (ネ (ノ)) で情報の共有を再確認、28回F (ウン) で自己確認しながら話を進めている。

〈表2〉から話者によって、ある程度ばらつきが見られるものの、大まかに類似の傾向が認められることが分かる。〈表2〉から白石方言の高年層話者は、他の形式に比べ、特に、引き込み形式である■ (ネ・サ) や説明累加形式A' (ソレデ)、自己確認形式であるF (ウン)、情報共有確認形式であるD「デショー (ノ)」を多用し、話を進めていることが分かる。

次の5. 2. 3節では、談話標識の組み合わせパターンを全て示すことで、これらの談話標識が具体的にどのように組み合わさって談話が展開するのかを検討する。

5. 2. 3 談話標識の組み合わせパターン

5. 2. 1節で談話標識の事例分析でも少しふれたが、談話資料1、2、3から談話標識だけを取り出して、談話標識の組み合わせパターンと談話展開を記号で示したのが〈図1〉〈図2〉〈図3〉である。〈図4〉はこれと同じ方法で筆者が採集した談話資料から抽出された談話標識の組み合わせパターンを全て整理し、その数とともに示したものである。

ただし、〈図1〉〈図2〉〈図3〉で■で表されている、引き込み形式である「ネ、サ」はその位置が自由で数が多いため、〈図4〉では省略した(A ■■■→A、A ■■B→AB)。また、A BBF→A BF、CCD→CDのように、連続して現れた談話標識は異なりとして一つだけ表記した。

〈図4〉から談話標識は下線部のように例外もあるが、A (A') ~Fの順序で現れていることが分かる。

それでは、談話標識の組み合わせパターンで、どのようなパターンが多いのかを調べてみると、特に、「説明開始・累加」(ソレデ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (A'+D: 52/1173→これは全組み合わせ数1173の中で、A'BD、A'DFのようにA' Dが入っているパターンを全て延べ数で数えたものである、以下同様)、「説明開始・累加」(ソレデ) + 「情報共有喚起」(ホラ) (A'+C: 51/1173)、「情報共有確認」(デショー (ノ)) + 「自己確認」(ウン) (D+F: 46/1173)、「情報共有表示」(ヤハリ) + 「自己確認」(ウン) (B+F: 42/1173)、「説明開始・累加」(ソレデ) + 「自己確認」(ウン) (A'+F: 39/1173)のようなパターンの使用が目立つ。

6) 談話標識の組み合わせパターンは、〈図3〉のように三要素以上組み合わせられて現れる場合もちろんあるが、その

<図4> 談話標識の組み合わせパターン

| パターン | 数 | パターン | 数 | パターン | 数 | パターン | 数 | パターン | 数 |
|--------|----|--------|----|-------|-----|---------|-----|-------|------|
| A | 66 | AF | 11 | C | 31 | A' | 159 | | |
| AA' | 3 | AFD | 1 | CAA'D | 1 | A'ABDF | 1 | A'CF | 5 |
| AA'B | 2 | B | 38 | CA' | 1 | A'B | 3 | A'CBF | 1 |
| AA'C | 1 | BA' | 1 | CA'C | 3 | A'BA | 1 | A'D | 25 |
| AA'F | 1 | BA'BD | 1 | CA'CA | 1 | A'BA' | 2 | A'DB | 1 |
| AB | 10 | BA'BDF | 1 | CA'D | 1 | A'BCB | 1 | A'DF | 4 |
| ABDF | 1 | BA'D | 2 | CD | 16 | A'BD | 3 | A'F | 17 |
| ABF | 6 | BA'F | 1 | CDF | 1 | A'BDF | 1 | A'FA | 1 |
| AC | 14 | BCD | 1 | CDE | 1 | A'BF | 3 | A'FD | 1 |
| ACA'CF | 1 | BCDE | 1 | CF | 7 | A'CA' | 1 | ■だけ | 209 |
| ACD | 4 | BCF | 1 | D | 107 | A'CA'C | 1 | 無標識 | 183 |
| ACDF | 1 | BD | 13 | DE | 1 | A'CA'CD | 1 | | |
| ACF | 3 | BDBF | 1 | DF | 16 | A'C | 23 | 計74 | |
| AD | 13 | BDF | 3 | F | 91 | A'CB | 1 | パターン | 1173 |
| ADE | 1 | BF | 21 | FD | 4 | A'CD | 8 | | |
| ADF | 6 | BFDF | 1 | FDF | 2 | A'CDF | 1 | | |

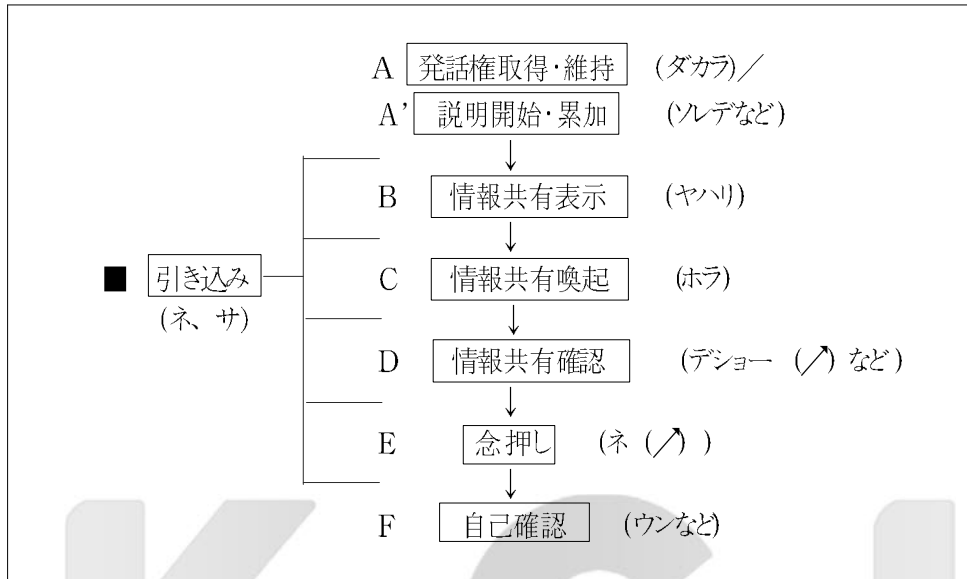
次の6節では、以上の白石方言の結果と、琴 (2005) の東京、大阪、仙台方言の談話標識の出現傾向を比較することで、日本語方言の談話展開の方法の地域差を考察する。

6. 白石方言における談話展開の方法 — 琴 (2005)との比較 —

以上、白石方言における談話標識の出現傾向を検討した。<図5> は白石方言の高年層の説明的場面で使用される談話標識をその一文の中での出現順序に従って整理したものである。(<図1> <図2> <図3> <図4> 参考)7)。

7) 数が極端に少ないし、単独で現れる場合については、5 2 節の談話標識の出現頻度で示したので、ここでは二要素の組み合わせパターンについて取り上げることにする。
7) <図5>において、談話標識はその位置が自由な引き込み形式である■(ネ、サ)を除き、A (A') ~Fの順

< 図5 > 白石方言の説明的場面における談話標識の枠組み



このような談話標識の種類と現れ方は地域を越え、日本語の談話全体に共通する基本的枠組みであることが予想される(琴2005)。しかし、談話標識の出現頻度や組み合わせパターンでは次に示すような地域差が認められる。

<表3>は琴(2005)の結果に今回の検討結果を加え、四方言の談話標識の出現頻度を比較したものである。括弧内の数字は東京方言の数値を基準(=1)とした場合の大阪方言、仙台方言、白石方言の割合である。談話標識の出現頻度にはそもそも種類によって違いが認められるため、このようにすることで相対的な比較が可能になると考えられる。

例えば、東京方言話者は一談話あたり、平均0.85、すなわち、1回弱の自己確認を行なっているが、それを1とした場合、大阪方言話者は2.66、仙台方言話者は1.63、白石方言話者は1.44、すなわち、大阪方言話者は3回弱、仙台方言話者は2回弱、白石方言話者は1回強の自己確認を行なっている。

番で現れる(横の実線は■(ネ、サ)の位置、縦の矢印は出現順序)。また、この図は全ての談話標識が現れる場合を仮定しているが、実際はこの全ての談話標識が現れるわけではなく、<図1><図2><図3><図4>で示したように、いくつか組合わさって現れ、これが何回か繰り返されることで、一つの談話を構成する。

<表3> 談話標識の出現頻度からみた四地域

| 地域 (談話数) | A ダカラ | | A' ソレデ | | ■ ネ、サ 引き 込み | B ヤハリ 情報共 有表示 | C ホラ 情報共 有喚起 | D デショー (ノ) 情報共 有確認 | E ネ(ノ) 念押し | F ウン 自己 確認 |
|---------------|---------------|-----------|----------------|----------|----------------------|------------------------|-----------------------|--------------------------------|------------------|---------------------|
| | 発話権 取得 | 発話権 維持 | 説明 開始 | 説明 累加 | | | | | | |
| 東京方言 (276) | 0.2 | 1.05 | 0.01 | 0.53 | 3.53 (1) | 0.43 | 0.24 | 1.41 | 0.05 | 0.87 |
| | 1.25(1) | | 0.54(1) | | | (1) | (1) | (1) | (1) | (1) |
| 大阪方言 (282) | 0.03 | 0.6 | 0.02 | 1.84 | 5.48 (1.55) | 0.46 | 0 | 0.96 | 0.04 | 2.31 |
| | 0.63(0.5) | | 1.86(3.44) | | | (1.07) | (0) | (0.68) | (0.8) | (2.66) |
| 仙台方言 (410) | 0.24 | 0.94 | 0.03 | 0.24 | 4.51 (1.28) | 0.75 | 0.56 | 1.75 | 0.22 | 1.42 |
| | 1.18 (0.94) | | 0.27 (0.5) | | | (1.74) | (2.33) | (1.24) | (4.4) | (1.63) |
| 白石方言 (227) | 0.11 | 0.64 | 0.03 | 1.45 | 3.44 (0.97) | 0.91 | 0.80 | 1.19 | 0.02 | 1.25 |
| | 0.75 (0.6) | | 1.48 (2.65) | | | (2.11) | (3.33) | (0.84) | (0.4) | (1.44) |

また、<表4> は談話標識の組み合わせパターンでどのようなパターンが多いのかを、次の方法で計算し、各地域ごとに示したものである。

各組み合わせパターン (延べ数) /
 全組み合わせパターン (延べ数) ×100
 = 各組み合わせパターンの割合

<表4> から東京方言では「発話権取得・維持」(ダカラ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (A+D)、 「情報共有確認」(デショー (ノ)) + 「自己確認」(ウン) (D+F)、 「発話権取得・維持」(ダカラ) + 「自己確認」(ウン) (A+F)、 「情報共有表示」(ヤハリ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (B+D)、 「情報共有喚起」(ホラ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (C+D)、大阪方言では、「説明開始・累加」(ソレデ) + 「自己確認」(ウン) (A'+F)、 「情報共有確認」(デショー (ノ)) + 「自己確認」(ウン) (D+F)、 「発話権取得・維持」(ダカラ) + 「自己確認」(ウン) (A+F)、 「説明開始・累加」(ソレデ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (A'+D) 「情報共有表示」(ヤハリ) + 「自己確認」(ウン) (B+F)、仙台方言では「情報共有確認」(デショー (ノ)) + 「自己確認」(ウン) (D+F)、 「発話権取得・維持」(ダカラ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (A+D)、 「情報共有表示」(ヤハリ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (B+D)、 「情報共有確認」(デショー (ノ)) + 「念押し」(ネ (ノ)) (D+E)、 「情報共有

喚起」(ホラ) + 「情報共有確認」(デショー (ノ)) (C+D) のようなパターンがよく使用されていることが分かる。

<表4> 談話標識の組み合わせパターンからみた四地域
—上位5位まで—

| 地域 順位 | 東京方言 | 大阪方言 | 仙台方言 | 白石方言 |
|----------|--------------------------------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 | A+D (115 / 1561 = 7.37%) | A'+F (152 / 1792 = 3.32%) | D+F (176 / 1876 = 9.38%) | A'+D (52 / 1173 = 4.43%) |
| 2 | D+F (64 / 1561 = 4.10%) | D+F (69 / 1792 = 3.92%) | A+D (172 / 1876 = 9.17%) | A'+C (51 / 1173 = 4.35%) |
| 3 | A+F (57 / 1561 = 3.65%) | A+F (68 / 1792 = 3.32%) | B+D (135 / 1876 = 7.20%) | D+F (46 / 1173 = 3.92%) |
| 4 | B+D (52 / 1561 = 3.33%) | A'+D (61 / 1792 = 4.43%) | D+E (90 / 1876 = 4.80%) | B+F (42 / 1173 = 3.58%) |
| 5 | C+D (36 / 1561 = 2.31%) | B+F (32 / 1792 = 3.58%) | C+D (89 / 1876 = 4.74%) | A'+F (39 / 1173 = 3.32%) |

琴 (2005) は東京方言、仙台方言では、「ダカラ」(A)、「デショー」(ノ) (D) の出現頻度が高く、A+D、D+F、B+D、C+D、D+Eのように「情報共有確認」を行うパターンが多いのに対して、大阪方言では「ソレデ」(A)、「ウン」(F) の出現頻度が高く、A'+F、D+F、A+F、B+Fのように、「自己確認」を行うパターンが多いことを述べた。

今回の検討の結果、白石方言は他の方言に比べ、「ダカラ」(A)、「デショー」(ノ) (D) の出現頻度が低い一方で、「ソレデ」(A) の出現頻度が高くなっていることやA'+D、A'+C、D+F、B+F、A'+Fのように、「説明開始・累加」(A') や「自己確認」(F) を行うパターンが多いことから、大阪方言に近い傾向を見せていることが明らかになった。

7. まとめと今後の課題

以上、談話標識の出現傾向から白石方言の談話展開の方法を明らかにした。その結果、白石方言は他地域に比べ、「ダカラ」(A)、「デショー」(ノ) (D) の出現頻度が低い反面、「ソレデ」(A') の出現頻度が高くなっており、A'+D、A'+C、D+F、B+F、A'+Fのように、「説明開始・累加」(A') や「自己確認」(F) を行うパターンが多いことが明らかになった。このような談話展開の方法は「ダカラ」(A)、「デショー」(ノ)

(D) の出現頻度が高く、A+D、D+F、B+D、C+D、D+Eのように「情報共有確認」(D) を行うパターンが多い東京方言、仙台方言とは異なるのに対して、「ソレデ」(A')、「ウン」(F) の出現頻度が高く、A'+F、D+F、A+F、B+Fのように、「自己確認」(F) を行うパターンが多い大阪方言とは類似していると言える。すなわち、東京方言、仙台方言は「ダカラ」(A) で自分が発話権を持つことをアピールし、「デショー」(ノ) (D) で情報の共有を積極的に働きかけていくことで、自分の話を相手に分からせようと努力する「他者説得型」の方言であるのに対して、大阪方言、白石方言はそうした相手に対する働きかけは消極的であり、「ソレデ」(A) で話の進行を単純にマークしつつ、「ウン」(F) で自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」の方言であると言える。

このように、仙台方言に隣接する白石方言がなぜ談話展開の方法において、大阪方言に近い傾向を見せるのか。久木田(1990)は東京方言と関西方言が異なる談話展開の方法を見せる原因として、「歴史が古く、お互いの生活をよく知っている関西人同士は、状況説明の中からそのような環境にある話者の立場や気持を理解することができるが、他地域からの人の流入が多い東京は直裁的に言わなければ理解してもらえないため、積極的の自己主張をするもの」と指摘している。共通語志向が強く、東北地方の中心地として東京のように他地域からの人の流入が多い仙台が大阪より東京に近い談話展開の方法を見せるのはそのためではないか、また、他地域からの人が少なく、大阪のようにお互いの生活に慣れている白石人同士が大阪に近い談話展開の方法を見せるのもこのようなことが原因しているのではないかと考えられる。

これらの地域の詳しい比較は今後の課題である。また、地域をさらに広げ、日本語方言における談話展開の方法の地域差及び世代差について明らかにすることも今後の課題である。

【参考文献】

- 久木田恵(1990)「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162 国語学会、p1~11
- 琴鍾愛(2005)「日本語方言における談話標識の出現傾向-東京方言、大阪方言、仙台方言の比較-」『日本語の研究』1-2、p1~18
- 田窪行則(1992)「談話管理標識について」『文化言語学-その提言と建設』三省堂
- 西野容子(1993)「会話分析について-ディスコースマーカーを中心として-」『日本語学』12-5 明治書院、p89~96
- 三牧陽子(1993)「談話標識の種類」『視聴覚教材と言語教育』6 大阪外国語大学AV技法研究会、p6~21
- メイナード・K・泉子(1993)『会話分析』くろしお出版
- Bruce,Fraser.1990“An approach to discourse markers”, Journal of Pragmatics 14, p219~236
- Deborah,Schiffrin.1987“Discourse markers”, Cambridge University Press.

要 旨

本稿では、宮城県白石方言を取り上げ、その高年層話者が説明的場面において、どのような談話標識をどのように使用し話を進めていくのかを、談話標識の出現傾向を分析することで明らかにした。また、東京方言、大阪方言、仙台方言の談話標識の出現傾向との比較をとおして、日本語方言における談話展開の方法がどのようなものであるかを明らかにした。

検討の結果、白石方言は他方言に比べ、「ダカラ」(発話権取得・維持)、「デショー」(∧)(情報共有確認)の出現頻度が低い一方で、「ソレデ」(説明開始・累加)の出現頻度が高くっており、「説明開始・累加」(ソレデ)や「自己確認」(ウン)を行う組み合わせパターンが多いことが分かった。

琴(2005)は東京方言、仙台方言では、「ダカラ」(発話権取得・維持)、「デショー」(∧)(情報共有確認)の出現頻度が高く、「情報共有確認」(デショー(∧))を行うパターンが多いのに対して、大阪方言では「ソレデ」(説明開始・累加)、「ウン」(自己確認)の出現頻度が高く、「自己確認」(ウン)を行うパターンが多いことを述べた。すなわち、東京方言、仙台方言は「ダカラ」で自分が発話権を持つことをアピールし、「デショー」(∧)で情報の共有を積極的に働きかけていくことで、自分の話を相手に分からせようと努力する「他者説得型」の方言であるのに対して、大阪方言、白石方言は「ソレデ」で話の進行を単純にマークしつつ、「ウン」で自分で納得することに主眼を置く「自己納得型」の方言であることが明らかになった。

このように、仙台方言に隣接する白石方言がなぜ談話展開の方法において、大阪方言に近い傾向を見せるのか。久木田(1990)は東京方言と関西方言が異なる談話展開の方法を見せる原因として、「歴史が古く、お互いの生活をよく知っている関西人同士は、状況説明の中からそのような環境にある話者の立場や気持を理解することができるが、他地域からの人の流入が多い東京は直截的に言わなければ理解してもらえないため、積極的の自己主張をするもの」と指摘している。共通語志向が強く、東北地方の中心地として東京のように他地域からの人の流入が多い仙台が大阪より東京に近い談話展開の方法を見せるのはそのためではないか、また、他地域からの人が少なく、大阪のようにお互いの生活に慣れている白石人同士が大阪に近い談話展開の方法を見せるのもこのようなことが原因しているのではないかと考えられる。

これらの地域の詳しい比較は今後の課題である。また、地域をさらに広げ、日本語方言における談話展開の方法の地域差及び世代差について明らかにしていくことも課題として残されている。

キーワード：談話標識、出現傾向、談話展開の方法、白石方言、地域差、自己納得型

| |
|---------------------|
| 투 고 : 2006. 8. 31 |
| 1차 심사 : 2006. 9. 9 |
| 2차 심사 : 2006. 9. 30 |

住 所 : (305-729) 대전광역시 유성구 전민동 462-4 청구나래아파트 110동 904호
電 話 : 010-6760-9554
e-mail : suzusii@hanmail.net

K C I